事は考へもので簡潔にした。土木家の集會ドンタク其他賑ひの場合若し餘興を必要とする時には、ポール又はツルの模型を持つて踊るのである。只今間に合せに草津節でやつて居る申す迄もなく吾輩は一扁の土木家で文筆や振り付けは出來ない幸い本會には斯道の大家も趣味者も澤山居られる事と信ずるのでどうか作曲と振り付けをお願ひしてやまない。又進んで改良會で全國的の道路修繕歌を作り作曲振り付けの計畫を樹立あらん事を進言する。

道路修繕歌（草津節）

一、道の修い我等の務め　次の箇條を良く守り

二、路肩手入れて不陸も直し　敷けばバラスは極く薄く

三、取れよ凸石直せよ轍跡　散りたバラスも凹埋めに

四、一に穴埋　二つにや弧形　三に路側の溝浚へ

五、路面全部に砂利をば敷くな　坂の雨水上で排け

三等車

なをた生

つい此の頃、土木學會のエキスカーションが福島方面で行はれて私も幸にそのメムバーに加はつた。

上野を十時何分に乘るといふ約束で私も三等客の一人となつた處が先輩の二、三子も同行したが彼氏等は二等に居たから何心無く挨拶に行つたら「何だ、君は役人じや無いか君なぞが二等に乘らなくてはこまるね」とやられた。勿論大した叱責の意味とも聽かなかつたがそれについて考へさせられた事だ。

私も相當な待遇を受ける官吏なのだから出張でも命ぜられて出掛けるなら決してケチな眞似は仕度くない、けれども、土木學會のエキスカーションは一土木學會員としての私事旅行なのだから官吏の體面論をふりまはす事もあるまい、況んや國家非常の時一切の事を國家の統制に俟つて國民を擧げて緊張しておるやうな時に私は社會的に相當な地位ある人が進んで贅澤に流れない行動をとる事を氣をつけるのはむしろ當り前ではあるまいかと思ふ。

議論は別として私は三等に乘合せた一人からその日氣持のいゝ話を聞いた。彼氏は一見素朴な老農家で北海道から上京の途中といふが先頃ある　宮樣が御渡道遊ばされてはしなくもその　宮樣の御行動を目近に拜して餘りの尊さと有難さに感激し日本國民として生を享けた喜をしみ〴〵感じたといふ事なのである。

五月も半となり午後二時、三時の日ざしは可なり嚴しく、乘客は半ばうだつたやうになつて居たその汽車中で此の一老農家の話を聞くともなく聞かされた私は一種の何とも言へぬ緊張した感激から體の引緊るのを覺えさせられた事であつた。私が此の車に乘合さなかつたらば此の感激も無かつたであらふと考へて私は此の車に乘合せた事を喜んだ。

私は今日以後もつと〴〵親しい心持で三等の客となる事に誇りを感ずるに至るであらふ。

一歩先の事

此の間四國四縣に出張して殆んど初めての土地を踏んだ私は可なり目新しい事物に觸れた事であつた。

高知縣で國道二十三號線の殆ど全線を視察したがこの國道についてこんな話を聞いた――國道二十三號線は東京よ

り高知縣廳に達するもので四國では高松から丸亀、琴平を經て猪鼻峠から德島縣に入り吉野川筋に沿ふて高知縣に入る路線である――この二十三號線の改修計畫が明治十九年度から七ケ年繼續事業で幅員四間計畫で目論まれて居る事だ。

其の後縣財政上の都合その他の理由で全部が四間計畫に出來上つてはおらぬ迄も高知領石間の如きは堂々四間に實施され而もその計畫は概ね近代高速度交通機關の運行にそのまゝ差支なく利用されて、五十年後の今日立派に役立つておるといふ一事は私をして感慨無量の思をさせずには置かなかつた次第である。

大昔には交通貿易は人肩に據つて物々交換をやつた事から始まつたものと思はれる。それから段々人間が利口になり、現狀に滿足せぬやうになつて荷車、牛馬車の需要を生じ、道路らしいものも開鑿されて遂には自動車の發明となりこれに刺激されて道路鋪裝が發達して來たことゝ思はれるが今では自動車の速度ですら滿足しかねて航空機の發明と迄進んで來たが次に來るものは果して何であらふか？おそらく航空機の極端な性能發揮と普遍化とではあるまいか。

明治の初年に――五十年も前に――隣縣を語らつて國道の大開鑿を目論んだ事は確に慧眼である。時代に一歩を先んじた事である。吾等は茲に啓發せらる可きでは無いか。

今や文運の進化は日と共に新にして五十年前の高知縣處の話ではとてもあるまいに今の當局は五十年前の高知縣令に面と向つて堂々對峙する事が出來るか疑無きを得ぬ。

私なぞも詢にお恥しいが、どうか、人間は時世に卒先して常に一歩先の事を考へ、一歩先の事を行ふやうでありたい。

技術奉公

此の間北支開發の第一戰に立つ可き三浦下關土木出張所長以下四十數氏を送り、三浦氏の決心を承つたが三浦氏は國家非常の時我邦獨得の土木技術を以て隣邦支那を開發し

以て東亞兩大國の眞の和平の爲めに貢獻せんが爲に一身の犧牲は顧る處で無い、勇躍卒先してその任に赴き技術奉公の任に當らんといふ事であつた。

獨り三浦氏のみならず、共に北支に赴く四十數氏の誰もが此の決意の下に敢然立つた事を知り、何共言へぬ敬虔の念に打たれた事である。

東洋に君臨する日本、嚮ては世界を指導すべき大日本帝國の臣民たらん程の者、凡てが此の意氣、此の熱誠有る可きである。徒らに躊躇逡巡、首鼠兩端なる者の如きは敢て難局日本を背負ふに足らず、吾人の斷じて組せざる處、北支遠征の勇士等希くは自重自愛以て技術奉公の大任を完ふせよ。至囑。

私は同志を代表して御挨拶を申上る任では無い、只三浦氏の意氣に感じ敢て此の紙上を借りて此の蕪辭を呈した次第である。匿名の儘であることなども平に御寛恕に預り度い。

三浦七郎氏を送る

一　記　者

◇

此度學國總動員の一態樣であり且つ、日支親善工作の表現として、我が土木陣營からも、北支臨時政府へ平和の戰士を見送るの機會が到來した。誠に千載に輝く欣快事である。